

LIBRARY #10

秋元雄史がゆく、九谷焼の物語



AFTER TALK

「秋元雄史がゆく、 九谷焼の物語」を終えて。

工房を訪ね、作り手と対話する中で、どんな気づきがあったのか。

今回は取材を終えた秋元さんの感想を、特別版・アフタートークとしてお届けします。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

2020.10.24～12.20まで開催された「産地のオンラインミュージアム KUTANism」の主要コンテンツの1つ。陶石から絵付け、そして料亭まで。九谷焼はいかにして生まれ、使われてきたのか。KUTANism全体監修・秋元雄史が、自らその現場に足を運び対話する中で、九谷焼の物語を再発見していく連載シリーズです。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

\ WEB版はこちら /





AFTER
TALK

「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」を終えて。

全9話に渡ってKUTANism総合監修・秋元雄史が、九谷焼の現場を訪ね歩いた「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。取材をおえて、秋元さんは「当時の仮説は、ものの見事に打ち碎かれた」と嬉々として語ります。工房を訪ね、作り手と対話する中で、どんな気づきがあったのか。今回は取材を終えた秋元さんの感想を、特別版・アフタートークとしてお届けします。



案内してくれた人

秋元雄史さん

KUTANism全体監修

東京藝術大学大学美術館館長・教授、練馬区立美術館館長

©2019 KAMADO Inc. (Photo by Yuba Hayashi)

九谷焼の“多様さ”への疑問

「現場をあたる」ということの重要性を、今回改めて感じましたね。正直言うと、僕も九谷焼というものの多様さを、どう捉えたらよいのかわからなかつたんです。

赤絵が細密化していく江戸時代までは、何とか現代的に解釈することができたんですが、明治以降の展開となると、もはや同じストーリーでは説明がつかなくなってくる。

なんでここまで「絵」を描くのだろうとか、この「暴れ具合」は何なのだろうって。

それは単に、変わりゆく時代の要請に応えてきた結果なのだろうか、と当初は考えていたんです。



しかし、それは外からの刺激に対して単に反応した動きではないということが、KUTANismでの取材を通してよく分かりました。かなり考えているし、かなり遊んでいる。

主体的に“際(きわ)”を攻めているというか、時代ごとに九谷焼の「テーマ」を見つけて取り組んでいる印象を受けました。

一つ例をあげると、絵付師の高聰文さんを取材させていただいた時に「ああ、本当に『絵』として九谷焼を描いていたんだ」ということに合点がいったんです。

明治以降に多用される九谷焼のモチーフである山水だとか歴史画だとかは、もう完全に水墨画のテーマですよね。

幕末までは漢画を描いていた狩野派のような、非常に高い教養を持った藩のお抱え絵師たちがいたわけですが、それが明治に入って解体していく。けれど、その“気分”だけが残って継承されていくというか、九谷焼に憑依していく。

絵付け用の洋絵の具の中でグレートーンをつくりだすという無茶なこともやつたり。

つまり狩野派と漢画の描法を焼き物に転化させている。これはかなり高度なことです。



「断続」の中で、刷新してきたもの

そしてこの時点でも「和絵の具をつかった五彩の九谷焼」というものからは全く離れているわけです。

そこで思ったのは、本当の九谷の面白さは「技法の断絶」というか、「美意識の断絶」にあるのではないかということでした。

実際に古九谷が途絶えたことも含め、九谷焼の特徴を「分断」にすると考えてみると、360年の分断と接続の歴史は、九谷焼そのものだと言えるのではないだろうかと。

「途切れている」ということは、ネガティヴに捉えられるかもしれないけれど、それによってまた違うものが芽吹いてくるということもある。逆説的だけれど、途切れることによって、九谷が生まれてきた。

途切れながらも続く、その「断続」の中で九谷焼が刷新してきたという考え方もできるのではないかでしょうか。



「青手芭蕉図鉢」／能美市九谷焼美術館 | 五彩館 | 所蔵



若杉窯「染付靈獸文皿」／能美市九谷焼美術館 | 五彩館 |



本源堂「彩色割取花鳥図大花瓶」／能美市九谷焼美術館 | 五彩館 | 所蔵

それぞれの時代の“九谷焼”があって、それは他の地域なら「有田焼」「薩摩焼」「波佐見焼」といった具合に、焼物の名前すら変わっていてもおかしくないくらいの違いなわけです。
スポーツで例えるなら、もはや別種目でルールからして違うというか。
その様々な様式の「総体」を「九谷焼」として呼んでいる。そこも非常に興味深いですね。

限りなく拡散していくエントロピー

従来の「継承」をベースとした焼き物の歴史観から見れば、九谷焼は「異端」に見えてしまいます。

けれど「本物はどれだ」という論調で、還元的に九谷焼を追い詰めていくと、逆に九谷焼を見失ってしまう可能性がある。

物理学にエントロピー(※)という理論がありますが、それがどこか九谷焼の進化の歴史とリンクするような気がしています。どんどん分化して、多様化していく。

一つに収斂されていくどころか、限りなく拡散していく。そのエントロピーこそが九谷焼なのではないか。

(※)エントロピー…原子的排列および運動状態の混沌性・不規則性の程度を表す量。

これまで物語を一直線につなげることばかり考えていたけれど、九谷焼の場合積極的に切った方が、分かりやすいし発見がある。

直線的な時系列で捉えない方が、九谷焼が見えてくるんじゃないかと思ってきたんです。

これはまだあくまで仮説ですけれど、自分の中では今のところ一番納得感があります。



すべての様式に通底する“過剰さ”

一方で、時代と様式の違いを超えて、九谷焼に通底しているものがあることも感じられました。

例えば、古九谷や吉田屋そして輸出九谷と、それぞれに様式は異なるので一見バラバラに見えるのだけれど、「過剰さ」という一点において共通している。

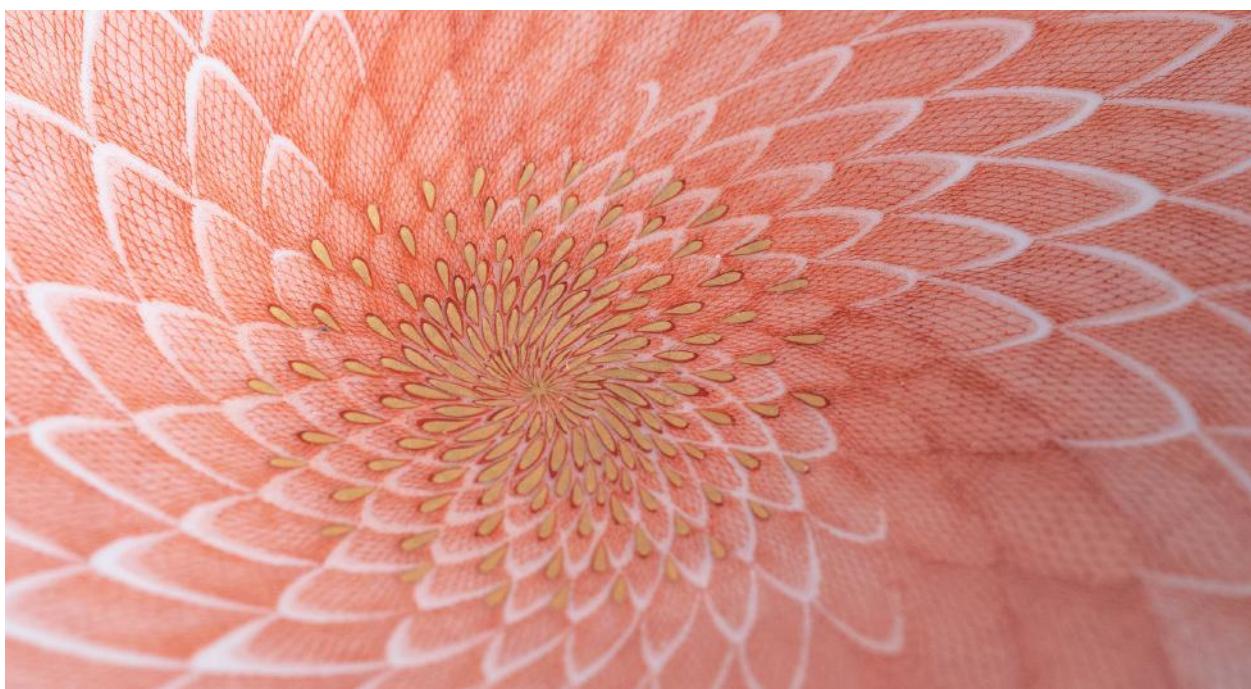
それは単に外見上の装飾的な過剰さのことでだけではなくて、「異様なテンションのかけ方」というか。

単なるプロダクトに留まらず、最初から芸術的な領域に踏み込む過剰さを作品に持ち込んでいる。

様式様式の熱量が、「職人技術」という言葉では簡単に片付けられないようなものがある。

それも誰に言われたでもなく、自分たちでグレードをどんどん上げていって、より難しくしていっているというか。

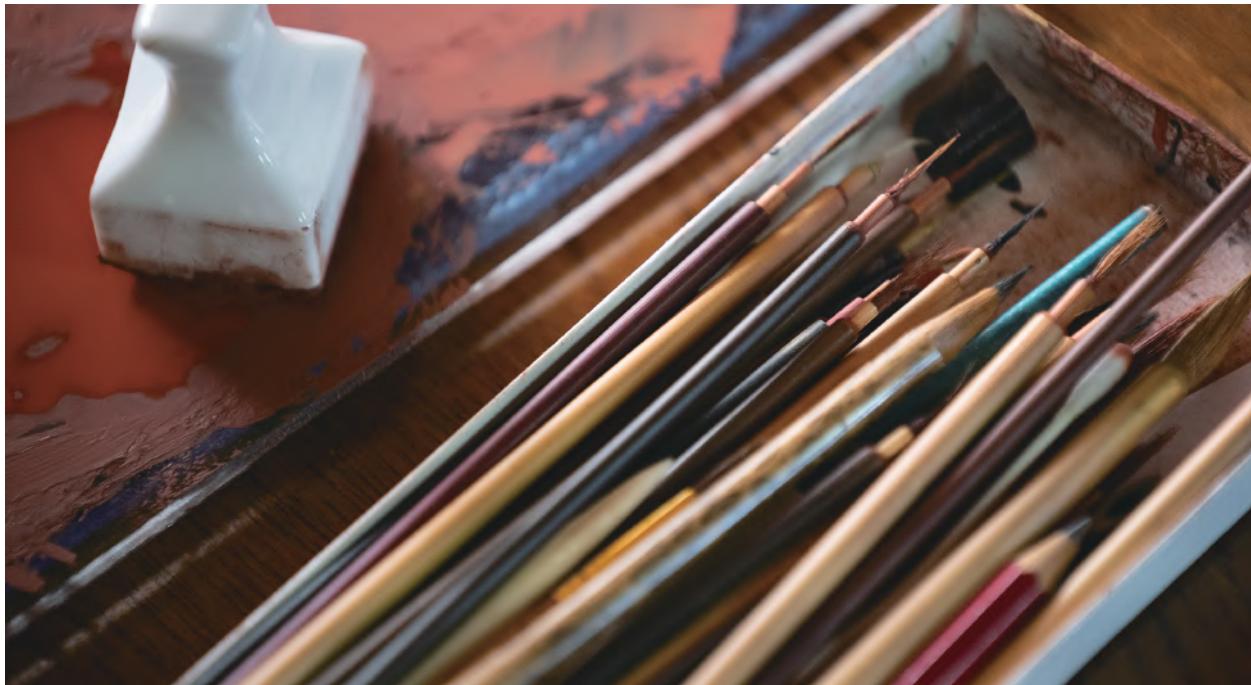
絵画や彫刻といった芸術作品ではなくて、焼物でここまで過剰に作り込んでいるというのはかなり独特だと思うし、僕はここが、九谷を九谷たらしめている所以なのではないかと思うんです。



そのことを今の私たちの言葉で説明しようとすると「それは『芸術九谷』ですか『産業九谷』ですか／アートですかデザインですか」という単純な言い方になってしまうのだけれど、九谷焼はもともと両方持っていたんだと思うんですね。そしてそれは、もしかしたら日本の工芸がもつ特質といえるのかもしれない。
二元論に落とし込めない面白さがそこにはある。

そして断絶する時代の中にも、もちろん「痕跡」というものは次の時代に残っていっているわけで。
それが「継承」ということなのかもしれないけれど。
それは祖父が制作している背中だとか、職人同士が囲炉裏を囲んで互いの技術を開陳しながら技術談義をしている姿を見聞きしていた、という実際的なことだったりする。

そういった「九谷焼のマインド」が、その時代その時代の“作り手”の中に宿っていっているというか、それが手を動かす職人だけじゃなく、プロデュースする人たちや色々なところにまで広がっているのが面白いですね。



九谷焼を捉えるフレームを、つくりかえる

でも、これも今回現場で直接話をうかがえたからこそ分かったことであって。
メジャメントというか、見るべき美的基準が、こうしてナビゲートしてもらうと目が細かくなって分かってくる。
出来上がった作品だけを見てもわからないものなんですよ。
見落としていたというか、もはや見えていない。

「時代感」というものが、我々が想像している以上に色々なもの見えなくしている部分があるんです。
それはまるでお天道様が時間とともに移動して、日が当たる部分はよく見えるけれど日陰になっているところ
は見辛い、といった風に。だからこそ、KUTANismのような取り組みの中で「言葉で補う」ということが、とても
大切になってくると思うんですよね。

今回の取材を通して「九谷焼の構造そのものを、あからさまにする」という作業が今一度必要なのは、と考え
るようになってきました。
今使われている言葉のフレームが、そもそも九谷焼に合っていないのかもしれない。
だからこそ、もっと丁寧に現場を見て行きたい。
来年には、またこの仮説を覆すような新しい発見があるかもしれないと思うと、今から楽しみでなりませんね。

(取材:2020年11月)





KUTANism

主催:KUTANism実行委員会 共催:能美市、小松市 協力:石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷焼団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援:北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局
〒923-1198 石川県能美市寺井町た35 (能美市役所 産業交流部 観光交流課内) MAIL:info@kutanism.com



クタニズム <https://kutanism.com>